

中国の漢字文献における「苗」という記述

——明清以前を中心に

張 勝 蘭

はじめに

苗族は中国南部における代表的な少数民族であり、また海外にも広く分布している国際的な少数民族でもある⁽¹⁾。中華人民共和国成立後、内部に全く異なるさまざまなグループを抱えているにも関わらず、一つの民族—苗族と識別された。その最も重要な理由は、「苗」と呼ばれる集団が、古くから存在するとみなされていることである。しかし、苗族自身は文字を持たないため、「苗」に関する歴史記述は漢字文献によるものである。

苗族の形成については諸説あるが⁽²⁾、現在は伝説上の「蚩尤・三苗」起源説が主流となっている。しかし、ここで注目したいのは「三苗」・「有苗」・「苗民」などの語が、秦漢時代までの漢字文献に見えるものの、その後消えて、遙か宋代になって再び「苗」だけが登場し、それが現在の苗族の民族名に繋がっている点である。現在苗族と呼ばれる彼らには、「モン」・「ムー」・「コション」などの自称があり、「苗」という呼称は「他者のまなざし」であり⁽³⁾、言い換えれば、「漢人」側からなされた「非漢人」との間の「境界線」でもある。数百年の間に消えていた「苗」と呼ばれる民族の記述は、どのようにして再出現し、そして現在の苗族の祖先とされたのであろうか。それを理解するためには、「苗」という漢字文献の歴史記述が、現在の中国に居住する苗族の形成背景において、具体的にどのような役割を果たしたのか、また彼らが持っているアイデンティティの形成にどのような影響を与えたのか、を再検討する必要がある。

このような苗族のアイデンティティの形成を考察する場合、これまで先行研究で論じられた「境界」、「歴史記憶」⁽⁴⁾、「他者のまなざし」、「意識モデル」⁽⁵⁾などの視点を取るべきだと思われる。つまり、「他者」との接触の中で「境界」が形成され、「他者のまなざし」が生まれる。同時に、接触したこと自体の一部と「他者のまなざし」に対する感知と取り入れが、「歴史記憶」に組み込まれ、更にさまざまな「意識モデル」作りの素材になっていく。この「意識モデル」はまたアイデンティティの拠り処になっていると思われる。特に三つの「意識モデル」という視点から、苗族アイデンティティの形成を考える場合、「自家製モデル」がそれぞれの下位集団が持つ「何々苗」というアイデンティティの、「主観的伝統モデル」が「苗族」というアイデンティティの、

「外部観察者モデル」が時には「苗族」、時には「中国の苗族」というアイデンティティの、最も重要な拠り処になっていると思われる。そして、この三つのモデルは互いに作用し、重層的なアイデンティティを作り上げたと思われる。また、文字を持たない苗族が三つのモデルを構築する時、漢字文献に頼らざるを得ない部分が多いため、従って、中国の漢字文献における「苗」という記述の影響が非常に大きいと思われる。

周知のように、明代に苗族の中心居住地である貴州に初めて省が設立された後、「苗」の呼称はそれまでの「蛮」の代わりに、南部非漢人の総称として使われ、更に清朝にかけて徐々に「何々苗」と細分化され、今日の苗族に繋がっている。なぜ明代になって「苗」は南部非漢人の総称になったのか。それを明らかにするためには、まず明代までの経緯の考察が必要である。

そこで、本論文では、特に「他者」による「境界」、「歴史記憶」、「意識モデル」の形成とアイデンティティとの関連の視点から、「他者のまなざし」としての「苗」という歴史記述を、明代以前の文献史料を通して再検討し、それによって、現在の中国における苗族社会と苗族アイデンティティの形成の背景を再考してみたい。

一、苗族形成の歴史に関する代表的な先行研究

まず、苗族の歴史を人類学、歴史学の手法で検討した代表的な先行研究の中で、特に「苗」という記述に重点を置いたものを取り上げてみたい。そのような意味での苗族史研究の草創期は、清末だとも言える。当時西洋からやってきた宣教師たちは、中国大陸における苗族の存在を世界に発信し始めた。彼らはキリスト教的な「普遍史」の観点から漢族の西來說を提起し、更に苗族が中国の漢字文献の「三苗」の末裔であることを主張した。このように漢族西來說・苗族先住説が盛んになると、それは日本の学者と中国の学者、さらには革命派⁽⁶⁾にも大きな影響を与えることになった。

特に日本の民族学者の鳥居龍蔵は、苗族研究に対して大きな貢献をした。彼は初めてフィールド調査に基づく中国西南地域の苗族の研究を行ったが、まさに先駆的学問実践であった。彼は苗族の歴史と密接に関わる「苗」に関して、次のように述べている。『尚書』に見える「三苗」が最古の記述であるが、その後の歴代文献においては、「苗」の名は登場しなくなる。しかし、南宋から再び「苗」の記述が登場するようになり、特に清朝に至って盛んに「苗」の名が現れる。この傾向は大いに注意すべきだとするが、何故宋・元・明の史料に「苗」に関する記述が多くなっていくのか、その歴史的背景を詳しく論じていない⁽⁷⁾。

これとほぼ同時代における欧米の苗族歴史研究は、フランスの宣教師 Savina の『苗族史』に代表される。Savina はキリスト教的な「普遍史」に基づき、言語学の研究手法も加えて、苗族の言語・歴史・当時の状況について考察した。特に歴史の部分に関しては、貴州の苗族の口頭伝承をもとにし、漢字文献を用い、フランス宣教師で中国研究家の戴遂良 (Ieno Wieger) の論文なども参照して、ある寒冷地から中国に

やってきた苗族の祖先は黄帝と戦い、追い出されてだんだんと南へと移動した、と想定した⁽⁸⁾。神話を史実のように論じ、中国の漢字文献の「三苗」を苗族の祖先とするなど、当時の苗族先住民説と同じ見解であるため、漢字文献を使用する際、それがどのような視点で「苗」と記述しているか、また苗族の形成とどのような関係があるのか、などの分析についてはあまり行われていない。

民族学者の凌純声は、苗族が「三苗」の末裔であるとする主流説を採らず、古代の「三苗」は今日の苗ではないと論じた。すなわち①秦漢以降、宋代までの文献史料に「苗」が見えず、字は同じでも「三苗」は現在の苗族と同じではない。②「三苗」は国名であり、禹に攻められて滅びた後、その国民がひとつの種族として存続するのは不可能である。③周代の「鬻」という集団は、春秋以後山西・河南から巴蜀へ、更に貴州に移動した。苗族の自称は大体 mong であり、これは「鬻」音韻変化である。従って、現在の苗族の祖先は「鬻」である、などと論じた⁽⁹⁾。

これに対して、最近の苗族形成史に関する研究は、日中学者を中心に以下のように行われている。

鈴木正崇をはじめとする学者たちは、主に現在の苗族の祖先祭祀、諸儀礼などの伝統文化における彼らの世界観、またその観光化などについて研究しているが、特に鈴木は、その歴史について取り上げている⁽¹⁰⁾。それによると、「三苗」については「古代から近世に至る文献に記された集団への呼称は、漢族による一方的な名づけが多く、実態をどの程度把握しているか判断が難しく、現地語の呼称や実態の詳細は不明である。文献名称は総称に近く、内部の差異が無視されて、雑居しているはずなのに他の集団との区別が明確すぎるなど信頼度の問題がある」と指摘し、「蚩尤始祖」の説は現代において再構築された「神話の現代化」による文化表象であるとしている。

武内房司は主に清代の史料を用い、土司制度、民間宗教結社を切り口として、苗族の歴史を研究している。特に「苗」という呼称を「他者の眼差し」とし、国家権力の浸透と漢民族の大量移住によって作られたものとしている。また「苗」という言葉には二重性があり、一つは「他者」の視点から見た「苗」であり、もう一つは外からの侵略に抵抗する中で形成された抵抗者としての「苗」であるとして、苗族の形成過程における「他者のまなざし」という重要な視点を提起した⁽¹¹⁾。さらに「三苗」や「苗」の記述と現在の苗族の形成との関係については、章炳麟の「苗族の祖先は三苗ではない」という論説を引用し、「苗」の呼称の再登場は宋代の辺疆開発によるものと指摘する。しかし、文献史料に基づいてその過程を具体的に検証するところが少ない。

苗族出身の学者である楊志強は、東京大学の博士課程において、歴史人類学的手法を活用して苗族形成史を研究した。その博士論文の中で、主に近現代の苗族が漢族と接触し、特にエリートを中心に苗族の自己統合を行っていることを論じている⁽¹²⁾。それによれば、苗族は中国における最も古い歴史を持つ民族であるが、現在の苗族知識人たちは、如何にして民族の自己統合を実現すべきかを模索している最中であり、苗族は古い民族であるが、形成途中の民族でもある、と。その博士論文の前編の「歴史

王朝の「苗」において、楊志強は「苗」の出現とその漢字の含意の変遷について分析している。すなわち、明代になって「苗」が南部非漢人の総称になった理由について、文献に見える「三苗」の居住地域が現在の苗族の居住地域と重なったこと、その「反抗性」が「三苗」にも苗族にも共通し、漢族の目に両者は同様に映ったことによる、としている。しかし、文献史料の角度からの具体的な検討が少なく、「三苗」に関する詳細な検討もあまりない。

吉開将人は「苗族史の近代」の中で、清朝末期における西洋・日本・中国の苗族の根源説を詳しくまとめている⁽¹³⁾。それによると、この時期は苗族への関心がかなり高まった。つまり革命派は、先住民である苗族は西方から来た漢族に敗れ、中原地域から追い出されたという説に基づいて当時の中国人の危機意識を煽り、苗族の歴史を政治的に利用した。漢族西來說と苗族先住民説をめぐる議論は、まさに多民族国家建設の是非をめぐる議論であり、それはまた満洲族に統治される清朝の下で、伝統的華夷思想による民族観が近代的に再編される過程で起きた、複雑な党派対立を反映する中国近代特有の歴史的現象でもあった。このような吉開の研究は、現在の苗族の形成に清末という重要な歴史的社会的背景を提示したものとして注目されるが、しかし「苗」の歴史記述と苗族の形成などとの関わりについては重点を置いていない。

以上のように、先行研究では、中国の漢字文献が苗族の形成に関する言説と密接な関係を持っていることを十分に認識している。しかし、中国の漢字文献で具体的に記述されている「苗」の歴史背景はどのようなものなのか、またそれは通時的に苗族社会とそのアイデンティティの構築にどう働きかけたのか、という問題については更に検討を要するであろう。

二、中国国内の苗族通史における「苗」についての文献記述について

中華人民共和国成立後、民族識別が行われる前後に、苗族の歴史研究として苗族通史が種々刊行された。それらの中で、古典に見える「苗」の記述に対する解釈は以下の通りである。

梁聚五は民国時代から中華人民共和国初期にかけての代表的な苗族のエリートである。彼の『苗夷民族發展史』（貴州大学出版社⁽¹⁴⁾）は、苗族学者により著された初めての苗族史とされている。かつて最も未開の地の一つと言われた貴州省黔東南地域雷山県西江村出身の彼は、民国期からさまざまな共産党の革命活動に参加し、中華人民共和国成立後、西南軍政委員会委員などに就任した。このような経歴を持つ梁は、かつて苗族が優秀な民族だったのに、ずっと圧迫されてきたとする観点から苗族の歴史を論じている。清末民国時代の歴史学者の著作⁽¹⁵⁾や、明清・民国期の文献などを引用し、苗族が中国の原住民であるという説を採っているが、彼は「苗夷民族」という語を用いているので、現在の中華人民共和国が識別する戸籍上の苗族より概念の幅が広

く、南部少数民族という範囲で論じているのであろう。そして、苗族が建てた国として、堯舜禹以前の「九黎」、堯舜禹時代の「三苗」、周の「荆蛮」などを挙げ、歴史的に見ても苗族は漢族に劣らない優秀な民族であり、他の民族と平等であるという論調になっている⁽¹⁶⁾。

1958年、毛沢東の指示により、少数民族社会歴史調査が中国科学院民族研究所を中心に、各地区の関係政府部門の下で行われた。しかし、文化大革命が起こり、中断せざるをえなかった。1985年ようやく出版された『苗族簡史』はその成果で、『国家民委民族問題五種叢書』の中の『中国少数民族簡史叢書』の一部をなす苗族史であり、つまり中国政府見解に基づくものである。これによれば蚩尤が率いた九黎集団は黄帝集団に敗れ、その後裔は「三苗」という集団となり、彼らが今日の苗族の祖先であるとしている。しかし、この中で「苗」という記述の変化とそれぞれの歴史的背景については、あまり検討されていない。

伍新福の『中国苗族通史』（貴州民族出版社、1999年）は、苗族出身の学者による著作である。『苗族簡史』と同様に、「三苗」と「有苗」は「蚩尤」・「九黎」の後裔であり、現在の苗族はその直接の後裔であるとする。また「三苗」集団は「華夏」集団との間に長期に渡って対立していたとする。さらに考古学の視点から、遺跡の分布地が「三苗」の居住していた荆湖地域であること、放射性炭素年代測定による紀元前2200年前後が「三苗」の活発時期であることなど多くのデータを挙げて、屈家嶺文化が苗族の早期の文化であると主張している。これも先の『苗族簡史』と同じように「三苗」との関係を強調するものである。しかし「苗」の記述が苗族の形成においてどのような役割を果たしたのかという検討は不十分である。

呉榮榛編の『苗族通史』（民族出版社、2007年）は国家“十一五”重点図書出版企画項目として、貴州をはじめ九省・市及び南京軍区・蘭州軍区・貴州省軍区の苗族役人と呉榮榛を含む多くの苗族学者によって編集された苗族史である。スターリンの民族理論に基づいて苗族の歴史文化を讀んでいる。それによると、苗族は水稻の「苗」に由来し、水稻を最初に栽培した民族とする。また「蚩尤」を始祖とし、蚩尤の時代から「三苗国」まで、その軍隊・刑法・宗教について論じ、更に文献史料の中の「四凶」⁽¹⁷⁾がその臣下たちであるとしている。つまり、一貫して苗族は蚩尤の時代から存在し、「三苗」の子孫であることを強調している。

以上のように、中華人民共和国成立後に刊行された代表的な苗族史を見てみると、苗族は中国の長い歴史の中で、漢族と共に歩んできた中華民族の一員であるという立場を強調している。これは現在の中国政府の少数民族に対する優遇政策の影響を受けたものと言えよう。さらに、このような苗族としての優位を確立するために、そのアイデンティティの拠り所としての自民族の歴史の解釈（一種のモデル意識）へのこだわりが強まっている。特に「華夏」と関わっていた「三苗」との繋がりが重要視されているようである。しかし、「苗」の記述は、苗族の形成、特に苗族アイデンティティの形成にとってどのような意味を持つのかという問題については、依然として検討が

不十分である。

「苗」の記述は、特に近代苗族自身の三つの「モデル意識」作りの重要な要素であり、苗族アイデンティティ作りの要素とも言えよう。その意識の芽生え・覚醒・強化を、「苗」の記述を分析することで読み取れるのかを再検討してみたい。従って、今日の苗族とそのアイデンティティの形成を検討する時、まず元代の正史に登場するまでの「苗」という記述がそれぞれの時代において、どのような目線・背景で書かれたのかを追及すべきだと思われる。

三、文献史料の再検討

(一) 秦漢時代までの「苗」に関する記述（宋代以前の一部の注釈も含む）

秦漢時代に到るまで、「苗」の語を含む「三苗」・「有苗」・「苗民」に関する史料は、多数存在する。「苗」の記述が最も古く見えるのは『尚書』虞書・舜典に「竄三苗于三危」とある記事である。同書にはさらに「三苗」・「有苗」・「苗」などの記述があるほか、それは後の文献にも引用されている。

舜典の記事に対する孔安国伝に、

三苗、國名、緡雲氏之後、爲諸侯、號饗饗。三危、西裔。

とあり、『楚辭』に収められた劉向の「九歎」・「愍命」に、

三苗之徒以放逐兮。

とあり、王逸注に、

三苗、堯之佞臣也。

とあり、同じく劉向の『說苑』・君道篇に、

當舜之時、有苗氏不服。其所以不服者、大山在其南、殿山在其北、左洞庭之波、右彭蠡之川、用此險也、所以不服。

とあり、

『大戴禮記』・五帝德篇に、

流共工於幽州、以變北狄、放驩兜於崇山、以變南蠻、殺三苗於三危、以變西戎、殛鯀於羽山、以變東夷。

とある。このように「三苗」は「國名」、「堯の佞臣」などと表現されていることから、かつて「三苗」集団は「華夏」集団（堯）と何らかの連盟関係にあったと見る漢人側の認識が読み取れる。また、「佞臣」・「放逐」などの記述からは、やはり「華夏」に対して「非華夏」という歴史像が徐々に作られたことが分かる。「有苗」集団はかつて地の利、すなわち資源を十分に有していたため、「華夏」集団（舜）に合併されるのを拒否していたという記述から、「非華夏」という対立的な集団の形成を強調する意図が読み取れる。『大戴禮記』のように「三苗」は「西戎」となり、羌人の先祖となっている記事もある。このように中国の漢字文献における「苗」は、「華夏」と対立した叛逆的な存在として記述されている。

さらに、現在の苗族の祖先とされている「蚩尤」・「九黎」と「苗」の関係について見てみると、『礼記』緇衣篇の孔穎達疏に

鄭以九黎爲苗民先祖、但上學蚩尤之惡、非蚩尤子孫。孔注『尚書』以爲九黎即蚩尤也、三苗則非九黎之子孫、與孔異。

とあるように、「蚩尤」・「九黎」・「三苗」の関係に対する秦漢以降の漢人側の見解は、必ずしも一致していないことが分かる。確かに「蚩尤」は伝説上の人物であり、「黄帝」も同様である。しかし、「非華夏」とされる集団は、「華夏」とされる集団と対立したり、連盟を結んだりしたことがあるに違いない。漢字文献の中で「非華夏」集団はしばしば「九黎」・「三苗」などと記述されている。しかし、限られている史料から、その複雑な組み合わせの変遷を正確に復元することは、ほぼ不可能であろう。つまり、「蚩尤」・「九黎」・「三苗」を現在の苗族の祖先とすることは困難である。王明珂の指摘のように、漢代において黄帝と炎帝は「華夏」の共同始祖となった。そして、この共同の歴史記憶で「華夏」を作り上げた。しかも、「三苗」の後裔とされている「西羌」などを用いて、「華夏」という境界を維持しているのである⁽¹⁸⁾。

「苗」の語は、「三苗」（「有苗」・「苗民」）の語として、伝説上の黄帝の時代から同じく伝説上の堯舜禹の時代まで登場しているが、後に「華夏」とは異なる集団の一つとされた。秦は統一後、中央集権国家となり、郡県制が布かれた。秦漢は「華夏帝国」として周辺への統治を拡大した。南部辺境地に蜀郡、巴郡、黔中郡、象郡などが設置され、中央王朝の影響は現在の貴州省の一部まで及んだ⁽¹⁹⁾。それにつれて、「舜は東夷の人」、「禹は西羌に興る」などのような歴史記憶が出てきた。つまり、境界は動態的な存在である。「華夏帝国」としての新たな境界が常に求められていたのではないと思われる。言い換えれば、境界維持のために、どうしても「三苗」のような「異質者」・「反逆者」という仮想敵の存在が必要であった。特に漢代になって、「南蛮・北狄・東夷・西戎」という「華夏」に対する「境界」が確立した。伝説上の「三苗」は「華夏」という概念に対する「非華夏」という存在にすぎない。しかし、これらの漢側に描かれた「非華夏」像は、後に苗族の「モデル意識」の中の「漢と敵対し、かつ匹敵する力を持っていた」という祖先像作りに大きな影響を与えたのである。

(二)「苗」の記述の再登場

「苗」の記述が再び文献史料に登場するのは、南宋期である。

①南宋期

朱熹『晦菴集』巻七一・記三苗に、

頃在湖南、見説溪洞蠻獠。略有四種、曰獠、曰狢、曰狨、而其最輕捷者曰貓。近年數出剽劫、爲邊患者、多此種也。豈三苗氏之遺民乎。古字少而多通用、然則所謂三苗者亦當正作貓字耳。

とあり、黎靖徳『朱子語類』巻七八・尚書・益稷に、

三苗、想只是如今之溪洞相似、溪洞有數種、一種謂之貓、未必非三苗之後也。史

中説三苗之國、左洞庭、右彭蠡、在今湖北江西之界、其地亦甚闊矣。
とあり、朱輔『溪蛮叢笑』⁽²⁰⁾ 溪蛮叢笑序に、

五溪之蠻皆盤瓠種也、(中略) 居者今有五、曰貓、曰獠、曰獠、曰獠、曰獠、曰獠。
とあるように、南宋に入り、「猫」(貓) という「非漢人」集団に対する呼称が『晦菴集』・『朱子語類』・『溪蛮叢笑』などに登場し、それを「苗」と関連付けたのは朱熹である。彼は漢字の通用の原則や、分布地域が重なる点などにに基づき、「猫」を古代の伝説で「華夏」と対峙した「三苗」と結びつけて推測している⁽²¹⁾。

現在の苗族の自称である「モン」・「ムー」などは「猫」(貓) の音と似ているので、「猫」(貓) がその自称に由来するという説もあるが⁽²²⁾、これはまだ検討の余地がある。しかし、朱熹の「三苗説」によって、この「猫」(貓) と呼ばれる集団は「三苗」と関連付けられ、完全な「他称」となり、彼の説は後に漢人の文人たちに大きな影響を与えた。しかし、「苗」という他称は宋代の正史には見えないのである。

また『溪蛮叢笑』からは、漢人が更に多くの南部非漢人と接触していたことが窺える。その中では「猫」の呼称が用いられ、「苗」と結びつけていないが、これらの蛮を皆な盤瓠の後裔とする記述は、後の苗族・瑤族・畲族のような非漢人集団であるか否かの根拠として、しばしば引用されるようになる。そして、現在においても盤瓠崇拜の有無は苗族であるか否かの根拠の一つとして見なされることがある。

では、なぜ南宋になってこのような現象が現れたのか。『宋史』卷四九三・蛮夷一に、「唐季の亂に、蠻酋、其の地に分據して、自署して刺史と爲る」とあるように、唐末から土着の非漢人の動向が活発になった。宋代以降、苗族を含む南方の非漢人が中国の中央王朝とどう関わり、そしてどのような政治状況の中から登場してくるのか、この問題をさらに検討しなければならない。

周知のように、宋は西北の遼・金・西夏と対立抗争し、西南地域に対して基本的に羈縻政策を採っていた。しかし、それは唐代の羈縻政策と違い、元代で土司制度に代わる過渡的な性格を持つものであった。これらの政策を通じて、中央王朝が徐々に西南地域に浸透してゆく重要な時期でもあった。

まず、宋代の周辺民族政策に対する特徴を見てみよう。その大きな特徴として、「重北輕南」と「拓土開辺」が挙げられる⁽²³⁾。北宋から南宋にかけて、当初は南方を軽視し、後になって大規模な開拓が行われた。その経緯を主に西南地域に対する政治指針・経済・軍事・法律の面から見てみよう。

「重北輕南」の典型的な表れの一つは、北宋以来の、西南少数民族間の衝突が生じた場合の重要政策、つまり「和断」の指針を採ったことである。「今也天下幸無它患難而唯西北之爲畏」⁽²⁴⁾とあるように、西南の少数民族の存在は宋を脅かすような存在ではなく、肝心なのは西北である、とする観念が窺える。そのうえ、唐滅亡の原因は南詔との関係にあったとする宋側の認識があり、西南の少数民族集団を南詔のように大きくならないようにした。また彼らの内部闘争に介入しないように中立的な立場を取った⁽²⁵⁾。たとえば、『宋史』卷四九六・蛮夷四に、

五年、黎洞夷人互相殺害、巡檢使發兵掩捕。上聞而切責之曰、蠻夷相攻、許邊吏和斷、安可擅發兵甲、或致擾動。

とあり、『宋會要輯稿』卷四二二九・蕃夷五之七七に、

夔州路言、五圍蠻嘯聚、謀劫高州、欲令暗砦援之。上以蠻夷自相攻、不許發兵。

とあり、『統資治通鑑長編』卷七二・真宗大中祥符二年七月の甲寅の条に、

益州言邛部川蠻殺保塞賣馬蠻十八人、即移牒黎州、得報稱邛部川與山後兩林素有仇隙、殺保塞蠻乃大渡河外蠻也。因下詔戒勅、勿使相侵擾。又詔邊臣不得輒入溪洞、邀功生事。

とあるように、当時、貴州・四川あたりの邛部川蠻と山後兩林蛮などの蛮族の争いに対してこれを不問に付すような「和断」によって、彼らの内部鬭争を解決した。

しかし、このような「輕南」政策の下で、ある程度宋と西南少数民族の間の摩擦は輕減されたものの、それがかえって少数民族の酋長の専制を助長させ、西南地域社会内部の対立をより深刻化させることもあった⁽²⁶⁾。北宋の仁宗中期、蓄積された不満が爆發し、反乱が多発し、「今之聽朝命者、十不存一」⁽²⁷⁾とあり、宋も西南地域に目を向けざるを得なくなった。

北宋の神宗の時、「王安石変法」が行われ、大規模な「拓土開辺」が開始された。それは特に湖南溪洞地域で行われた。そのため、この地域において「非華夏」が占有する「山田」が「華夏」式に「水田」化されていった⁽²⁸⁾。このような形で漢人と南部非漢人の接触が多くなっていった。

『宋史』卷四九五・蛮夷三に、

唐末、諸酋分據其地、自爲刺史。宋興、始通中國。奉正朔、修職貢。間有桀黠貪利或疆吏失於撫御、往往聚而爲寇、抄掠邊戶。朝廷禽獸畜之、務在羈縻、不深治也。熙寧間、以章惇察訪經制蠻事、諸溪峒相繼納土、願爲王民、始創城砦、比之内地。元祐初、諸蠻復叛、朝廷方務休息、乃詔諭湖南、北及廣西路並免追討、廢堡砦、棄五溪諸郡縣。崇寧間、復議開邊。於是安化上三州及思廣諸峒蠻夷、願納土輸貢賦、及令廣西招納左右江四百五十餘峒。尋以議者言、以爲招致熟蕃非便、乃詔悉廢所置州郡、復祖宗之舊焉。

とあるように、西南地域少数民族社会の内部鬭争による不安定のため、一般の溪洞民はむしろ宋への帰順を望んだ。つまり、結果として、彼らの「中央王朝」に対する意識がかえって強化されたことがあったのではないと思われる。また北宋は羈縻州制度を廃棄することを試み、成功はしなかったが、ここに直接統治しようとする姿勢が窺える。

『宋會要輯稿』卷四二三〇・蕃夷五之九五に、

招應荆湖南北路、溪洞頭首土人内有子孫依條合行承襲職名差遣之人、及主管年滿之人、合得恩賜之類、并仰逐路帥司疾取會詣實保明奏聞。

とあるように、南宋になると、更に西南地域の安定を重視し、できるだけ争いを防ぐために、世襲について「条」に従い、「名簿」を申告するなどを規定した。

開拓と密接に関連しているのは、西南地域の義軍の設置である。義軍とは宋が西南少数民族を募集して編成した少数民族の軍隊である。

『文献通考』卷一五六・兵考八・郡国兵（郷兵）に、

蓋溪峒諸蠻、種類滋熾、保據巖嶮、或叛或服、控制陬落、須其土人、故置是軍。皆選自戶籍蠲免徭賦、番戍寨柵。大率安其上風、則罕攫瘴毒、知其區落、則可制狡獪。

とあるように、義軍を募集する理由と宋側の意図が知られる。つまり「夷を以って夷を制す」である。また、『楚南苗志』卷二・附朱文公熹奏劄に、

區處詳密、立法行事、悉有定制。峒丁等皆計口給田、擅鬻者有禁、私易者有罰。一夫歲輸租三斗、無他繇役、故皆樂爲之用。邊郵有警、衆庶雲集、爭負弩矢前驅、出萬死不顧。

とあり、同卷一五六・兵考八・郡国兵（郷兵）に、

治平二年、廣西安撫司集左右兩江四十五溪峒知州、峒將各占鄰迭爲救應、仍籍壯丁補校長、給以旗號。峒以三十人爲一甲、置節級。五甲置都頭、十甲置指揮使、五十甲置都指揮使。總四萬四千五百人以爲定額。各置戎械、遇有寇警、召集之。二年一閱、察視戎械、有老疾并物故名闕、選少壯者填、三歲一上其籍。

とあるように、宋は田地を与える「計口給田」の方法によって「半農半兵」の義軍を編成し、彼らを自給自足させて西南地域の反乱鎮圧に利用しながら、ある程度少数民族の生活も安定させようとした。

また「保甲制」も取り入れられた。そして、南宋になると義軍に対する依存はますます強くなっていった⁽²⁹⁾。これらの軍事組織を存続させることを通じて、「中央王朝」という「国家」概念を少しずつ「苗」を含む西南地域少数民族に浸透させてゆき、それらの少数民族は「王朝の一分子」としての意識を多かれ少なかれ持つようになっていったのではないと思われる。

経済については、「元豊中、軍興乏馬」⁽³⁰⁾とあるように、羈縻政策の一環と言われている馬の貿易⁽³¹⁾を中心にして北宋から始まった。南宋は、更に広西に「買馬司」を設立した。『嶺外代答』卷五・邕州横山寨博易場に、

蠻馬之來、他貨亦至。蠻之所賫麝香、胡羊、長鳴鷄、披氍、雲南刀及諸藥物、吾商賈所賈、錦繪豹皮、文書及諸奇巧之物、於是譯者平價交市。

とあるように、南宋馬の売買で、ほかの商品交換も盛んになり、広南西路は溪峒などの少数民族と近隣周辺との交流がより頻繁になっていった⁽³²⁾。

法律については、『宋史』卷四九三・蛮夷一に、

荆湖轉運使言、富州向萬通殺皮師勝父子七人、取五藏及首以祀魔鬼、朝廷以其遠俗、令勿問。

とあるように、宋では少数民族の習俗を許認するような政策を採っており、南宋になって『慶元条法事類』が作成された。中の「蛮夷門」は少数民族に対する最初の特別規則であるといわれ、特に彼らに「田地を与えること」と「官職に就く時の優遇」につ

いて更に強化した⁽³³⁾。羈縻政策とはいえ、徐々に支配を浸透させてきた南宋は、法律の面においても「軽南」から「開拓」へ転換し、両者のバランスを取るようになった。

以上の状況をまとめると、次のようになるであろう。宋では羈縻政策を採り、特に西南地域の少数民族に対して、結果的に彼らを「民」として直接統治するような姿勢は取らなかった。これは「苗」の記述が正史に登場しなかった間接的な理由の一つと思われる。しかし、宋は次第に西南地域に目を向けるようになった。特に南宋において、北方民族による更なる侵入圧迫が起ると、南部非漢人の動向も激しくなった⁽³⁴⁾。そのため南宋は彼らを利用しながら、彼らを「中央王朝—国家」に組み込もうとする姿勢も出てくる。これらはある程度次の元代の土司制度の設立の基礎になったと言える。

こうした歴史背景の下で、当然ながら役人や文人を含めて、漢人は辺縁域と奥地にいる南部非漢人と接触する機会が次第に多くなっていった。そのため、彼らを詳しく弁別する必然性が高まった。言い換えれば、彼らの自称を含めてその特徴に強い関心をもつようになった。そして、「漢人」側から「非漢人」に対して、「他称」を付与するとともに、南部「非漢人」集団と「漢人」集団の間に、より明確な境界が作り出された。このようなことが、個々の小さな南部「非漢人」集団にとって、それぞれの「集団記憶」⁽³⁵⁾となって、その集団のアイデンティティの形成に働きかけたと思われる。しかし、この時代の「猫」（猫）と呼ばれる集団の実態については、まだ不明な点が多い。散居する彼らにとって、広範囲に横に連携する社会的環境はまだ成立していなかったと思われる。つまり、“われわれは「猫」（猫）である”という「境界」がまだ形成され始めたとは言えないのである。しかし、彼らにはその上にある「中央王朝」という存在に対する意識が徐々に芽生えていたと考えられる。

②元代

元代になってようやく、正史に「猫」（猫）が登場し、「苗」も登場するようになる。そして、元末になると「苗軍」と呼ばれる軍隊も出現する。

A 「猫」（猫）の記述

『元史』卷一六五・郭昂列伝に、

昂率兵屠之、山徭・木猫・土獠諸洞盡降。(1266年)

とあり、同卷一六六・石抹狗狗列伝に、

二十一年、以蒙古軍八百從征散貓蠻、戰於菜園坪・滲水溪、皆敗之。壁守石寨、月餘散貓降、大盤諸蠻亦降。(1284年)

とあり、同卷一三五・塔海帖木兒列伝に、

九溪蠻・散貓・大盤蠻尚木的世用等叛、從行省曲立吉思帥師往討、皆擒之、及殺其酋長頭狗等。(1289年以前)

とあり、同卷一五・世祖本紀至元二十六年条に、

青山猫蠻以不莫臺・卑包等三十三寨相繼内附。(1289年)

とあり、同卷一六・世祖本紀至元二十七年条に、

戊午、貴州猫蠻三十餘人作亂、劫順元路、入其城。(1290年)

とあり、同卷一七・世祖本紀至元二十九年条に、

葛蠻軍民安撫使宋子賢請、詔諭未附平伐・大甕眼・紫江・皮陵・潭溪・九堡等處諸洞猫蠻。(1292年)

とある。

以上、年代順に正史の『元史』に登場する「猫」(猫)に関する記述を挙げた。これより「猫」(猫)は南部非漢人集団の一種として散居していたが、元代になると彼らの動向は激しくなり、そのため、元の統治者に討伐され、帰順することが少なくなかったことが分かる。

B 「苗」の記述

『元史』卷二九・泰定帝本紀泰定二年条に、

丁亥、平伐苗酋的娘率其戸十萬來降。(1325年)

とあり、同卷三六・文宗帝本紀至順三年条に、

二月辛丑朔、八番苗蠻駱度來貢方物。(1332年)

とある。

このように、1325年頃から突然「苗」の呼称が多く現れるようになる。周知のように、その大きな歴史背景として、元代になって南方の非漢人集団の地区で土司制度が実施されたことと関連があるだろう。王朝と南方各地の土司との間には、明らかに実質的な従属関係があった。この二つの史料から、帰順していない「猫」と投降した「苗」の違いが目立つ。史料を見る限り、世祖本紀では「猫」という記述であり、泰定帝本紀と文宗帝本紀では「苗」という記述である。1253年、元の世祖忽必烈は南方に初めて「宣撫司」-大理宣撫司を設立した。宋代よりも広大な国土を持つ元は、支配下の「民」を蒙古人・色目人・漢人・南人と四等級に分けたが、宋代と大きく違って、南部非漢人を四等級の「民」として直接支配下に置き、そして土司制度を実施した。土司制度の設立は三段階とされていて、その第三段階は「辺境化」の特徴がある⁽³⁶⁾。『元史』卷九一・百官七に、

宣慰司、掌軍民之務、分道以總郡縣、行省有政令則布于下、郡縣有請則爲達于省。有邊陲軍旅之事、則兼都元帥府、其次則止爲元帥府。其在遠服、又有招討、安撫、宣撫等使、品秩員數、各有差等……凡六道、山東東西道、益都路置。河東山西道、大同路置。淮東道、揚州置。浙東道、慶元路置。荆湖北道、中興路置。湖南道、天臨路置……廣東道、廣州置。大理金齒等處、蒙慶等處……廣西兩江道、靜江路置。海北海南道、福建道、八番順元等處。察罕腦兒等……曲靖等路、羅羅斯、臨安廣西道元江等處。

とあるように、元は西南地域に対する全面的な土司制度の実施を開始した。泰定帝も文宗帝も共にこの時期の皇帝である。推測にすぎないが、「苗」の記述が異なる理由

は、直接従属していない「猫」から従属を始めた「苗」へと変化したことがその背景にあるのではないか。元代は「苗」を含む南部非漢人を土司制度によって「民」として統治し、それによって「苗」という呼称を正史に登場させたが、それは苗族の形成において大きな意味をもたらしたと考えられる。

さらに後の至正十四年（1354）から「苗軍」の記述が登場する⁽³⁷⁾。

C 「苗軍」

陶宗儀⁽³⁸⁾『南村輟耕録』巻八に、

初群無頼嘯聚溪洞、（楊）完者内深賊、持權詐。故衆推以為長。王事日棘、湖廣陶夢禎氏舉師動王、聞苗有衆習鬪擊、遣使往招之、由千戸累階至元帥。……所統苗獠洞猺答刺罕等、無尺籍伍符、無統屬。相謂曰阿哥、曰麻線、至稱主將亦然。喜著斑爛衣、製衣袖、廣狹脩短與臂同。衣幅長不過膝、袴如袖、裙如衣、総名曰草裙・草袴。固脰以獸皮、曰護項。束要以帛、兩端懸尻後若尾。無間晴雨、被氍毹、狀絶類犬。按『邕管雜記』・『溪蠻叢笑』等書所載、伍溪之蠻盡槃瓠種屬。曰猫、曰猺、曰獠、曰狃狔、曰狃猪、字皆从犬、則諺所謂猫犬者信然。

とあるように、元末の混乱期、元の政府軍に従って活動した「苗軍」と呼ばれる少数民族（主に南部非漢人）の軍隊が登場する。実はこの「苗軍」は元代西南地域の土兵であり、つまり宋代の義軍がその前身である。この土兵は土司の管轄下にあり、土兵制度は土司制度実施の基礎とも言われている⁽³⁹⁾。『元史』巻一二・世祖本紀至元二十年条（1283）に、

四川行省參政曲立吉思等討平九溪十八洞、以其酋長赴闕、定其地、立州縣、聽順元路宣慰司節制。

とあるように、元朝の土兵は土司に所属し、中央・地方共に直接支配の関係にあった。また『元史』巻一六六・信苴日列伝に、

率燹、燹軍二萬為前鋒、導大將兀良合臺討平諸郡之未附者、攻降交趾。

とあるように、元になると土兵は対外戦争にも徴用されるようになる。これはある意味で、一種の国家正規軍とみなせるのではあるまいか。こうして彼らに「国家」の概念が更に明確に認識させられていったと思われる。

この苗軍に関して、植松正の研究によると、その首領の楊完者の出身は「苗」（猫）と称する非漢人集団との関連性がある⁽⁴⁰⁾。また趙志剛によれば、「苗軍」は主に「苗民」からなり、猺人なども含まれたとする⁽⁴¹⁾。『南村輟耕録』巻八に楊完者の経歴、及び彼が率いた苗軍の状況が比較的詳細に記されている。その中に「苗」の呼称が見え、この非漢人軍隊を「苗・獠・洞・猺」と述べている。さらにその服装から、彼らは『溪蛮叢笑』などに記載されている「猫・猺・獠・狃狔・狃猪」の槃瓠種と関連するとも述べられている。このように、南宋の「猫」（猫）という非漢人集団の記述は、元代になって「苗軍」という政府軍に従って活動した南部非漢人の軍隊と結びついたのである。

また『元史』巻一四三・余闕列伝に、

廣西猫軍五萬、從元帥阿思蘭沿江下抵廬州、闕移文謂苗蠻不當使之窺中國、詔阿思蘭還軍。

とあるように、漢人側は「猫軍」という非漢人軍隊に対して「苗蛮」という語を使っている。すると、統治者側に「苗蛮」という非漢人集団に対する認識が強まったのではないか。

〔図1〕 苗軍の主な活動地域



これらの史料に基づき、主な「苗軍」の活動を表1のようにまとめてみると、首領の楊完者とその「苗軍」（他の苗軍も含む）は、最後まで元と反乱軍に翻弄された。しかし、彼らは武昌・杭州・嘉興などの重要な戦いでは、至正十二年から至正十八年までの間、特に長江流域において広く活動し、「苗軍」という名を広く轟かせた。そして、楊完者死後の至正二十四年にも別の系統の「苗軍」の活動が見られ⁽⁴²⁾、また明代の正史にも記載されているように、後の明朝にもその存在を大いにアピールしたと思われる。

〔表1〕 苗軍の主な軍事活動年表

| 年号 | 西暦 | 内容 |
|---------|---------|--|
| 至正十二年四月 | 1352年4月 | 陶夢禎と共に、楊完者とその苗軍、反乱軍徐寿輝から一時的に武昌・漢陽を奪還する。 |
| 至正十二年秋 | 1352年秋 | 楊完者、苗軍を率いて、反乱軍を鎮圧するために、江浙へ入る。一方、その父である楊正衡、広西で戦死する。 |
| 至正十三年 | 1353年 | 苗軍、強大化し、元順帝に軍事活動を停止させられ、余闕にその行動を監視される。 |
| 至正十五年六月 | 1355年6月 | 楊完者の苗軍、饒州路・池州路で活動する。 |
| 至正十五年八月 | 1355年8月 | 湖広左丞のト蘭奚の苗軍、河南地方で劉福通と対抗する。（楊完者の苗軍と別もの） |
| 至正十五年九月 | 1355年9月 | 楊完者、江浙行省右丞阿魯灰と共に、朱元璋勢力の攻撃から集慶路を守る。その後、揚州で張士誠を破る。 |

| | | |
|----------|----------|---------------------------------------|
| 至正十六年二月 | 1356年 2月 | 楊完者の苗軍、張士誠の攻撃から嘉興路を守る。後、反乱軍の王与敬を撃破する。 |
| 至正十六年四月 | 1356年 4月 | 苗軍、松江で張士誠配下の史文炳の攻撃を受け、戦わずに逃げる。(松江の変) |
| 至正十六年八月 | 1356年 8月 | 嘉興で張士誠を破り、苗軍の勢力また一時的に強化する。 |
| 至正十七年 | 1357年 | 楊完者の苗軍、徽州・建徳・烏龍嶺の戦いで、朱元璋に敗れる。 |
| 至正十八年八月 | 1358年 8月 | 楊完者、投降した張士誠に逆襲され、その弟の伯顔と共に自殺する。(杭州の変) |
| 至正十九年十月 | 1359年10月 | 朱元璋に帰順した楊完者配下の蔣英ら、張士誠と戦う。 |
| 至正二十二年二月 | 1362年 2月 | 楊完者配下の蔣英ら、背反し、張士誠に帰順する。 |
| 至正二十六年 | 1366年 | 朱元璋の攻撃により、杭州が陥落し、張士誠に帰順した苗軍、捕虜にされる。 |

〔凡例〕

- ・『元史』・『明太祖実録』・『南村輟耕録』に基づいて作成。
- ・『楊氏族譜』は未見のため、関連の内容は、趙志剛氏の論文を参照した。

終わりに

以上、明代までの文献史料における「苗」の歴史記述を再検討した。それによれば、「三苗」とは「華夏」（漢）が作った上代の「非華夏」（非漢）との「境界」ということになる。「三苗」と「九黎」は、現在の苗族と直接に結び付けることはできないが、漢人を主体とする「華夏」側に描かれた「非華夏」の像は、「華夏」にとってなくてはならない「境界」的な存在だった。また「三苗」は文字を持たない「非華夏」の集団にとって重要な歴史記憶となって、その「漢に敵対した」という「モデル意識」作りの重要な拠り所となり、後に「非華夏」の歴史の再編成において大きく影響した。

宋代になると、「軽南」と「開拓」により、政治指針・経済・軍事・法律のあらゆる面で、「苗」を含む西南地域の少数民族に「中央王朝」という国家概念を与えた。しかし、漢人統治の宋代では「苗」を含む南部非漢人を完全に「民」として見ていたわけではなかった。正史の『宋史』にも「苗」という記述は登場していない。しかし、漢人と南部非漢人の接触が多くなると、漢人は南部非漢人を彼らの自称・居住地・風俗習慣などによって細分化するようになる。その結果、より細かい「境界線」が作り出された。南部非漢人集団はこのような歴史記憶を受け継ぎ、「外部者観察モデル」の一部として徐々に形成されてゆくことで、そのアイデンティティが次第に覚醒させられたのである。中でも「猫」と称する集団の動向が激しくなると、宋・元代の文人は彼らを「三苗」と結び付けた。「猫」という「境界」から「苗」という「境界」に変わりつつあった。「苗」を用いたのは、宋代の朱熹の説などの影響によるもので、それはその後の元・明・清代から現在にかけても大きな影響を与えている。

元代に入り、土司制度が実施された。宋代と違い、非漢人統治の元では、これらの少数民族を直接統治下にある「民」として扱った。「苗」という記述も、土司制度が西南地域に全面的に展開されてから正史に登場するようになる。特に土兵という少数

民族軍隊は、国家正規軍のように徴用される場合もあった。後に元・明の王朝交替の混乱期に登場した「苗軍」は、まさにこのような土兵であり、彼らは自らの少数民族地域を守るよりも、国家を守る軍隊になっていた。この「苗軍」の存在は「苗」という南部非漢人集団に対する呼称を、統治者側に強く印象付けたと思われる。漢人と南部非漢人の間に、「苗」という境界線をこれまででなかった規模で広げた。このような「他者」による「境界」が形成・拡大されることで、後の明では「苗」という南部非漢人集団に対する認識が高まり、そして、ますます多くの南部非漢人集団に、「苗」という「境界」を意識させたのではないか。言い換えれば、そのアイデンティティとなる土台が少しずつ形成されたと思われるのである。特に「中央王朝—国家」という概念が徐々に浸透し、それが歴史記憶の一部として「中央王朝の中のわれわれ」と意識する部分となり、今日の苗族の形成に大きな影響を与えたと考えられる。

つまり、苗族を含む南部非漢人にとって、中央王朝が直接統治を開始した元代から、すこしずつ「中央王朝—国家」という特別な境界ができ始めた。常に「中央王朝」という境界を通して、「漢人」という境界を認識させられることも増えていったと思われる。そして、元以前の王朝と違い、彼らは元代になってから「中央王朝のまなざし」や「漢人のまなざし」などが、土司などを介して、さまざまな歴史記憶となり、そのような重層的な意識も形成されていったと思われる。以上により、筆者は現在の苗族の形成時期を、少なくとも土司制度が実施された元代から考察すべきと考える。明代以降の変遷については、また別稿で論じたい。

注

- (1) 2000年の人口調査によれば、苗族の全人口は894万116人、貴州には429万9954人が住む。東南アジアにも同系統の人が居住しており、また19世紀七十年代の政治変動に伴い、北アメリカなどにも渡った。現在東南アジアは200万人ぐらゐ、アメリカは30万人ぐらゐ、フランス、オーストラリア、カナダなどには、5万人ぐらゐがいる。
- (2) 苗族の起源に関して、かつて「三苗説」、「秦漢形成説」、「宋代形成説」、「明朝形成説」などがある。
- (3) 武内房司「歴史の中の苗族—少数民族の移住と抵抗」(『へるめす』54、1995年)。
- (4) 王明珂『華夏辺縁—歴史記憶与族群認同』(允晨叢刊、1996年)
- (5) ①自家製モデル—自分たちが通常行っている生活様式などに対する認識に基づく内容、②主観的伝統モデル—「* * *として本来そうあるのが正式のやり方」と信じ込んでいる内容、③外部観察者モデル—他のグループの行動様式にステレオタイプの(格式化)に思い描く内容、と三つある。
バーバラ・ウォード(瀬川昌久訳)「さまざまな意識モデル—華南の漁民」(瀬川昌久・西澤治彦編/訳『中国文化人類リーディングス』風響社、2006年)
- (6) 例えば、中国国内における代表的な人物として、君主立憲派の梁啓超が、苗族先住説を取り、「三苗」が苗族の祖先で、更に「蚩尤」がその始祖と主張した。しかし、彼と政治理念が違う章炳麟は、それを否定し、「三苗」は苗族と無関係だと論じた(『排滿平議』(『章太炎全集』四、上海出版社、1982年))。
- (7) 鳥居龍蔵『苗族調査報告』(東京帝国大学理科大学人類学教室編、1907年)

- (8) F. M. Savina『苗族史』(肖風・梅蓉・陳勇・安侯衡・龍河麗訳)(貴州大学出版社、2009年)
- (9) 凌純声「苗族名稱の遞變」(『中国边疆民族与環太平洋文化』聯経出版事業公司、1978年)
- (10) 鈴木正崇『ミャオ族の歴史と文化の動態—中国南部山地民の想像力の変容』(風響社、2012年)
 実際、筆者は2009年8月のフィールド調査で、雷山県民族局の局長である呉玉貴から、「中国凱里蚩尤陵園資料選編」(中国凱里蚩尤陵園建設籌備委員會辦公室編、2000年)という内部資料を入手した。この資料によると、「蚩尤陵園」の建設は「凱里市(2000-2015)旅行業發展総体企画」というプロジェクトの一環としている。しかし、その時点でまだ建設されていなかった。
- (11) 武内房司「歴史の中の苗族少数民族の移住と抵抗」(『へるめす』54、1995年)
- (12) 楊志強「「苗」から「苗族(ミャオ族)」へ—近代民族集団の形成及び民族的再構築の過程について」(東京大学総合文化研究科博士論文、2005年)
- (13) 吉開将人「苗族史の近代：漢族西來說と他民族史観」(『北海道大学文学研究科紀要』124、2008年)、「苗族史の近代(続編)」(『北海道大学文学研究科紀要』127、2009年)
- (14) 原稿は1950年に完成したが、正式に出版したのは2009年で、『苗族發展史』に改名した。
- (15) 王桐齡『中国民族史』(文化学社、1934年)、林惠祥『中国民族史』(商務印書館、1939年)など。
- (16) 梁聚五『苗族發展史』(貴州大学出版社、2009年)。これは梁氏の『苗夷民族發展史』を題目だけ変えた最新の版本である。
- (17) 『春秋左氏伝』文公一八年に、「四凶乃謂之渾敦、窮奇、檮杌、饕餮」とあるように、一般的に四凶はこれらを指す。
- (18) 王明珂『華夏辺縁—歴史記憶と族群認同』(允晨叢刊、1996年)、414-415頁
- (19) 嚴建華 石恪 楊建猛「秦漢时期的黔中文化」(『貴州民族研究』2009-5、2009年)
- (20) 『溪蛮叢笑』は朱輔という人の見聞録である。非漢人らの「奇風異俗」が記載されている。朱輔は、生没年不詳、字は季公、桐郷人、南宋末の人。他は詳細不明。
- (21) 楊志強前掲論文
- (22) 楊通儒「苗族的「苗」字来源及其許多自称的含義」(『苗学研究』一所収、貴州民族出版社、1989年)。また南部「非漢人」集団に対する呼称は、彼らの言語に由来することがあるという論もあるが、戸崎哲彦「柳宗元の文学と楚越方言(下)—唐代中期・9世紀における中国西南少数民族の言語文化」(『彦根論叢』310、1998年)を参照。
- (23) 安国楼『宋朝周辺民族政策研究』(文津出版社、1997年)、14頁
- (24) 蘇徹『欒城集』卷一九「新論・中」
- (25) 趙永忠「宋朝對西南民族衝突的和斷—以成都府路和梓州路為例的考察」(『貴州民族研究』2010-1、2010年)
- (26) 安国楼前掲書、28頁
- (27) 『統資治通鑑長篇』卷一四九・仁宗・慶歷四年五月乙酉条
- (28) 上西泰之「北宋期の荆湖路『溪洞蛮』地開拓について」(『東洋史研究』54-4、1996年、35頁)。
- (29) 林文勳「宋代西南地区的少数民族義軍」(『思想戦線』1990-1、1990年)
- (30) 『宋史』卷一九八「兵志」一二
- (31) 林文勳「宋代西南地區的市馬与民族關係」(『思想戦線』1989-2、1989年)
- (32) 崔紫君 趙自成「宋代西南邊境的經貿述略—以廣南西路五州為例」(『広西地方誌』2012-2、2012年)
- (33) 謝波「從『慶元條法事類・蠻夷門』看南宋民族法制」(『思想戦線』2010-4、2010年)
- (34) 岡田宏二『中国華南民族史研究』(汲古書院、1993年)、399頁

- (35) 「集団記憶」という理論について、王明珂氏の『華夏辺縁—歴史記憶と族群認同』（允晨叢刊、1996年）を参照。
- (36) 陸勅「元代宣慰司の辺疆演化及軍政管控特点」（『雲南師範大学学報』（哲學社會科學版）44-6、2012年）
- (37) 『元史』卷四三・順帝本紀至正十四年条に、「是月、答失八都魯復苗軍所據鄭・鈞・許三州」とある。
- (38) 陶宗儀（1321～1407）元末の歴史学家、文学家。
- (39) 李良品『論元代西南地区土兵制度的形成』（『銅仁学院学報』15-1、2013年）
- (40) 植松正『元代江南政治社会史研究』（汲古書院、1996年）、426頁
- (41) 趙志剛「楊完者和元末苗軍」（『中南民族学院学報』1990-3、1990年）
- (42) 『元史』卷一四五・達禮麻識理列伝に「約束東西手八剌哈赤・虎賁司、糾集丁壯苗軍、火銃什伍相聯、一旦布列鐵斡竿山下、揚言四方勤王之師皆至、帖木兒等大駭、一夕東走、其所將兵盡潰」とある。

主要参考文献

〈日本語〉

- 上西泰之「北宋期の荊湖路『溪洞蛮』地開拓について」（『東洋史研究』54-4、1996年）
- 植松 正『元代江南政治社会史研究』（汲古書院、1996年）
- 大島立子「元代の湖広行省支配—溪洞民対策を中心に」（『東洋学報』66、1985年）
- 岡田宏二『中国華南民族史研究』（汲古書院、1993年）
- 佐竹靖彦「唐宋期福建の家族と社会—山洞と洞蛮」（『人文学報』277、1997年）
- 鈴木正崇『ミャオ族の歴史と文化の動態—中国南部山地民の想像力の変容』（風響社、2012年）
- 武内房司「歴史の中の苗族—少数民族の移住と抵抗」（『へるめす』54、1995年）
- 戸崎哲彦「柳宗元の文学と楚越方言（下）—唐代中期・9世紀における中国西南少数民族の言語文化」（『彦根論叢』310、1998年）
- 鳥居龍蔵『苗族調査報告』（東京帝国大学理科大学人類学教室編、1907年）
- 楊 志強「「苗」から「苗族（ミャオ族）」へ—近代民族集団の形成及び民族的再構築の過程について」（東京大学総合文化研究科博士論文、2005年）
- 吉開将人「苗族史の近代：漢族西來說と他民族史観」（『北海道大学文学研究科紀要』124、2008年）
- 吉開将人「苗族史の近代（続編）」（『北海道大学文学研究科紀要』127、2009年）
- バーバラ・ウォード（瀬川昌久訳）「さまざまな意識モデル—華南の漁民」（瀬川昌久・西澤治彦編/訳『中国文化人類学リーディングス』風響社、2006年）

〈中国語〉

- 安国楼『宋朝周辺民族政策研究』（文津出版社、1997年）
- 崔紫君・趙自成「宋代西南辺境の経貿述略—以広南西路五州为例」（『広西地方誌』2012

-2、2012年)

- 曹家齐「宋代西南陸路交通及其發展態勢」(『宋史研究論叢』2008、2008年)
- 郭声波·王寧「從宋元五姓番、八番羅甸地区分佈演變看元初辺疆民族行政制度的重大改革」(『貴州民族研究』2011-6、2011年)
- 胡起望·李廷貴編『苗族研究論叢』(貴州民族出版社、1988年)
- 凌純声「苗族民稱的遞變」(『中国辺疆民族与環太平洋文化』聯經出版事業公司、1978年)
- 梁聚五『苗族發展史』(貴州大学出版社、2009年)
- 林文勛「宋代西南地区的市馬与民族關係」(『思想戰線』1989-2、1989年)
- 林文勛「宋代西南地区的少数民族義軍」(『思想戰線』1990-1、1990年)
- 陸韜「元代宣慰司的辺疆演化及軍政管控特點」(『雲南師範大學學報』44-6(哲學社會科學版)2012年)
- 李良品「論元代西南地区土兵制度的形成」(『銅仁學院學報』15-1、2013年)
- 劉復生「宋代西南地区的塩馬貿易」(『宋史研究論叢』2008、2008年)
- 『苗族簡史』編者組『苗族簡史』(貴州民族出版社、1985年)
- 彭建英「元代民族政策的類型特點及其主要指導思想」(『西北史地』1996-2、1996年)
- 強文學「北宋西南鄉兵的設置及作用」(『天水師範學院學報』2009-3、2009年)
- 石朝江『世界苗族迁徙史』(貴州人民出版社、2006年)
- 王明珂『華夏辺縁—歷史記憶と族群認同』(允晨叢刊、1996年)
- 伍新福『中国苗族通史』(貴州民族出版社、1999年)
- 吳榮臻·吳曙光等編『苗族通史』(民族出版社、2007年)
- 吳永章「論宋代對南方民族的羈縻政策」(『中南民族學院學報』1983-3(哲學社會科學版、1983年)
- 吳宏岐·汪新莊「元代西南地區農牧經濟的發展」(『中国歷史地理論叢』1993-4、1993年)
- 謝波「從《慶元條法事類·蠻夷門》看南宋民族法制」(『思想戰線』2010-4、2010年)
- 尤中編『中国西南的古代民族』(雲南人民出版社、1980年)
- 楊通儒「苗族的「苗」字来源及其許多自稱的含義」(『苗學研究』一所取、貴州民族出版社、1989年)
- 嚴建華·石恪·楊建猛「秦漢時期的黔中文化」(『貴州民族研究』2009-5、2009年)
- 趙志剛「楊完者和元末苗軍」(『中南民族學院學報』1990-3、1990年)
- 章炳麟「排滿平議」(『章太炎全集』四 上海出版社、1982年)
- 趙永忠「宋朝對西南民族衝突的和斷-以成都府路和梓州路為例的考察」(『貴州民族研究』2010-1、2010年)
- F.M.Savina(肖風·梅蓉·陳勇·安侯衡·龍河麗譯)『苗族史』(貴州大学出版社、2009年)

(本學大学院博士後期課程在籍)